



中部 新 国際空港の物語

… 地方の大構想が歩いた道 …

池田 誠一

【8】地元の理解…一歩、そして一歩

1 反対の声

大プロジェクトの実施には、なによりも、地元の理解・納得が必要になります。地元知多地域には、空港の立地決定前には誘致運動すらありましたが、決定と共に沈黙に変わりました。

まず始めに声が出たのは漁業関係者からでした。少しさかのぼりますが、平成元年5月。立地決定の直後に、地元愛知県漁連から漁場が汚染するからと反対声明が出されました。翌2年初には、対岸の三重県漁連からも反対声明が出されています。海上空港での漁業者の反対運動は、長崎空港、関西空港等で行なわれており、中部でも大きな課題と認識されていました。また離れてはいますが、陸域でも航空機騒音が、これも全国の空港で大きな問題になっていました。空港が地域に及ぼす影響にはプラスの事項もありますが、まずマイナスの事項について、地元の声に耳を傾け、その理解を得ることが求められたのです。

今回は、基本構想、全体像と空港構想が具体化していく中で、地元とどのように調和を図っていったかをみてみます。

2 地元の声に

(1)まず、常滑から

空港立地が決まると地元の市民から不安の聲が出始めました。空港の騒音問題が中心でしたが、広く環境全般への影響やアクセス・地域開発による影響など、様々な声が聞かれるようになりました。これらの声に対し、ま

常滑市新空港懇談会 [H3年・常滑市]

場 所	日 時	参加者	備考(発言)
南稜公民館	2月16日	64人	6人22件
中央公民館	2月19日	85人	12人23件
青海公民館	2月21日	78人	11人18件
鬼崎公民館	2月23日	66人	10人21件

中部新国際空港に係る知多地区説明会 [H3年・愛知県]

市・町	日 時	参加者	主な質問項目
常滑市	7月20日	約300人	騒音、情報
南知多町	7月24日	約260人	漁業、砂
大府市	8月7日	約150人	騒音、アクセス
美浜町	8月26日	約260人	騒音、砂
知多市	9月30日	約150人	騒音、情報
半田市	10月1日	約280人	アクセス、開発
東浦町	10月2日	約50人	アクセス
東海市	10月7日	約200人	騒音
武豊町	10月25日	約150人	騒音、開発
阿久比町	11月5日	約85人	騒音、アクセス

図1 平成3年、初めて行われた市民への新空港説明会

ず常滑市が動きました。市民への説明会です。平成3年2月。市内の4中学校区で新空港懇談会が開催されました。県や空港調査会も参加し、初めての市民向けの空港説明会になりました(図1上)。質問もいろいろ出ましたが、多くは航空機騒音に関するものでした。例えば、

- ①関西空港は沖合い5^{キロ}なのに、どうして常滑は2^{キロ}なのか?とか、
- ②7^{キロ}も離れた新大阪駅で聞く騒音は大きく、2、3^{キロ}では心配だ など。

この答は、①は関西と中部の地形の違いによるものであり、②は音の発生源が空港ではなく航空機であることによるものです(図2)。が、そういう応答の中から分かったことは、航空機騒音の問題のひとつとっても、「市民の理解」ということの難しさでした。

(2) 漁業者と

海上空港を造ろうとする場合、陸域の用地に相当するのが、海域では「漁業権」です。この権利は民法で保障され、定置、区画、共同の各漁業権があります。また許可を得て事業を行っている「許可漁業」にも一定の権利が存在するのではないかと考えられました。前述のように、常滑沖の海上に候補地が決まるとすぐ、愛知県漁連と対岸の三重県漁連から反対声明が出されており、海上空港は漁業への対応が大きな問題であることを印象付けていました。

しかし、具体的な交渉になったのは現地の海域調査の受け入れ問題でした。3年5月、

愛知県知事が県漁連に現地調査の要請をしました。しかしながら空港建設反対の漁連が受け入れるはずはありません。そして、長い交渉が始まりました。その流れを愛知県漁連に関する新聞記事から拾ってみると…

- 3年5月 漁連総会、知事要請に反対決議変えず
- 3年10月 漁連理事会「軟化」?
- 3年11月 理事会で結論出す
- 4年4月 知多支部・説明会受け入れ
- 4年6月 知多各組合で説明会
- 4年10月 知多支部、現地調査認める
- 4年11月 漁連、調査受け入れへ
- 5年2月 調査協力金、合意
- 5年3月 漁連、正式受け入れ

…と、実に1年10ヶ月に及ぶ長い交渉になったのです。交渉は複雑で、水面下の部分も多く、経過は詳しくは分かりません。しかしながら、これらの表に出た記事からは、地元の知多支部が一般漁業者に目を向けたことが大きなポイントになったようです。

平成5年3月20日、ポーリング等現地の海域調査が始まりました。そしてこの日は、中部空港の記念すべき一歩となったのです。

(3) 知多五市五町へ

3年6月の「空港の全体像」の公表の後、今度は愛知県が知多半島全体に説明会を開催することになりました。いわゆる知多半島の五市五町に対してです。7月の常滑市を皮切りに11月の阿久比町まで計10回開催されました(図1下)。各回とも多くの市民とマスコミを集め、地域の関心呼びました。質問はやはり騒音に関するものが多かったのですが、半

島の東側ではアクセスが、南側では漁業や砂の問題が問われるなど、地域性を見ることができました。

常滑の懇談会、そして五市五町の説明会。もちろんこれらの説明会だけで、地元知多地域50万の人の理解を得ることはできません。しかしながら、空港という大プロジェクトの初めての地元説明

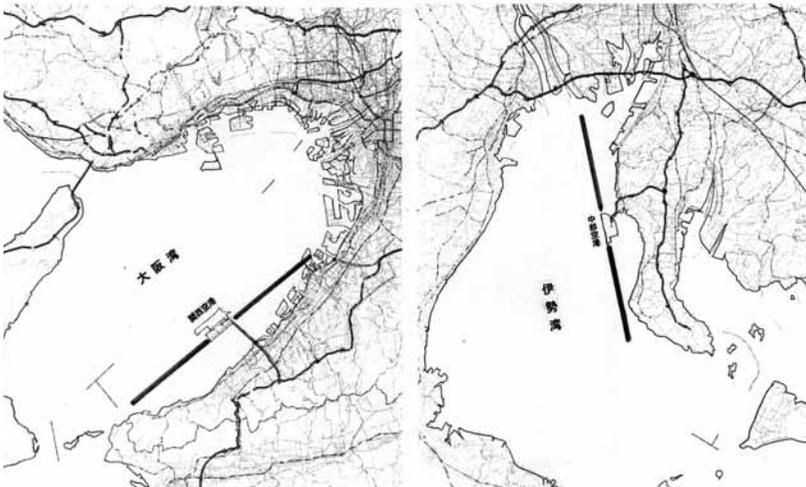


図2 関西空港と中部空港の付近の地形のちがい。関西(左)はへこんだところで、陸域までの距離が遠くなった

会が、大きな混乱もなく、無事に終わることができたことは、建設への確実な一歩になったといえるのではないのでしょうか。

③ 総行 知多の海岸を歩く③

… 新空港を望む町 — 常滑南部 …

新空港の対岸になる常滑の中・南部のうち、中部は前回紹介しましたが、南部は空港でどんな影響を受けたのでしょうか。今回は空港の対岸部になる常滑市南部を歩きます(図3)。



図3 常滑市南部。太線は紹介したルート

〈対岸の町〉

常滑駅から半島の南に向うバスに乗ります。少し行くと右手に海が見えてきます。ジャニス工業前でバスを降りると、対岸は空港です。空港までは3*。位あり、圧迫感はありません。南に旧道(国道)を進むと、右側に「白老」で知



ジャニス工業(旧西浦製陶)の対岸にみえる空港島



今も「白老」をつくる澤田醸造



初めての地元説明会だった南陵公民館

られた澤田酒造があります。知多半島は江戸時代には200を越す蔵があり、海運業と連携し江戸の酒の有力な産地だったといえます。しかし今ではわずかに7つになってしまいました。海岸に出ると苧屋漁港です。

常滑南部の海岸にも、苧屋、大谷、小鈴谷などの漁港があり、のりの養殖も盛んです。港の南は丘が残っていて海岸線は通れません。左に細い道を辿って旧道に出て南に進みます。坂を上ると信号交差点です。左に少し入ると南陵公民館があります。ここが中部新国際空港プロジェクトの初めての地元説明会会場でした。平成3年2月16日。マスコミに取り囲まれた異常な緊張感で始まった説明会。…もう、その時を覚えている人もなく、遠い昔のことになりました。交差点に戻り、南に進みます。この付近は高台で、海岸が通れないの



知多四国58番札所、来応寺

で旧道を行きます。

少し行くと通りの1本奥に玉泉寺があり、その先には来応寺があります。共に知多四国88ヶ所の霊場の一つで、59番と58番の札所になります。春のお遍路のシーズンには札所めぐりで賑わう所です。西に海岸に向かうと大谷漁港になります。

〈遠望の町〉

港からは海岸線を進みます。左手からは山が迫ってきます。その山一といっても30分程ですが一の上に南景楼という料理旅館がありました。部屋から空港も望める景勝の地でしたが最近閉館されたようです。狭い海岸を進むと小鈴谷に入ります。小鈴谷は海岸線が大きく内側にカーブした一番奥になり、ここにも漁港があります。しかももう一つ有名なのは、ソニーの創業者の一人、盛田昭夫氏の実家、盛田酒造があることです。道を旧道からはずれて海岸線を進むと醸造場が点々と続き、その先に盛田味の館という見学と飲食の施設があります。

空港を展望するため、その手前の道を左に、山道を上ります。坂を上り右に曲ると小脇公園があり、その中に展望台もあります。海岸の緑と真っ青な海。その向こうに浮かぶ空港島は、もう「遠望」という言葉が似合いそうです。公園の前を今度は右に坂を下ると、坂井



海岸にせり出した丘。山の上になぜか南景楼が見える



盛田醸造の「味の館」



小脇公園から小鈴谷漁港の向うに空港島を望む

温泉湯元館の前に出てきます。南に海水浴のできる海岸が続き、その端は常滑市と美浜町との境になります。

来し方を振り返ると、緑と寺と、蔵と湯と窯と古き良き知多がありました。そこに欠けた新しさ。空港がうまく調和してくれれば…と思わずにはおられません。旧道に沿って左に曲り、新道に出たら右に進むと、少し先の左手に名鉄の上野間駅が見えます。

4 「過激派」の情報

国際空港の建設には、昭和40年代の成田空港に始まる、過激派といわれる団体との悲しい過去があります。それは関西空港でも続いていました。中部空港の知多の説明会でも、専門家の分析では、その団体の何人かが紛れ込んでいるという情報があり、緊張しました。

しばらくして、あるペーパーが届けられました。それは過激派のひとつの派の機関紙でした。中では中部空港の知多の説明会が特集で取り上げられており、強烈な批判が展開されていたのです。「知多半島の人民を爆音公害にさらす空港を、説明した〇〇は、人に優しい空港と…」と、実名も入っていました。比較的穏健派とのことでしたが、放火やロケット爆弾は、中部空港でも他人事ではなかったのです。

プロジェクトを動かしていたのが、国家ではなく地方だったことが相手にとって不足だったのでしょうか。それとも、以後も徹底した対話路線が取られたためでしょうか。この不幸な対立による問題は、中部空港では未然に防ぐことができた…といえそうです。

〈主な参考文献〉

- ①『広報とこなめ4月号』(1991、常滑市)
- ②『中部新国際空港新聞記事』(1991他、中部空港調査会)
- ③溝口泰正『中部空港物語』(2008、中日新聞)